



◆ 明治大学馬術部

明治大学馬術部の皆さん。豊かな自然に囲まれた場所に練習施設がある。

馬場は小ぶりだが夢は大きく古豪復活を目指す!

個々の選手の力のみならず、100年にわたって受け継がれてきた伝統と、部員やスタッフの着実なサポート力が、強豪を強豪たらしめているようだ。

写真・文=c3.photography

馬場の大きさと強さは必ずしも比例しない

2020年度に創部100周年を迎える明治大学（以下、明大）馬術部。全日本学生馬術三大大会・三種目総合優勝17連覇を達成するなど、輝かしい活躍を収めてきた名門である。しかし、昨年の第69回全日本学生賞典障害馬術競技大会では団体3位を獲得したものの、全日本学生馬術三大大会・三種目総合では4位に甘んじ、悲願の団体総合優勝には至らなかった。

部員は石井李佳さん（商学部3年）を主将に、総勢15名。部長の柳沢敏勝さん、副部長の大里修一さん、監督の佐藤五志さん、助監督の中村章さんと青山辰美さん、コーチの大貫俊隆さんらによる献身的なサポート体制のもと、古豪復活に向けた改革を実行中だ。

小田急線・生田駅から徒歩10分ほどにある明大・生田キャンパスは、春にはコブシや桜が、秋には銀杏が彩りを添える緑豊

かな多摩丘陵の高台に位置する。広大な生田校舎では理工学部や、農学部から大学院まで、約8000人の学生が学んでいる。

敷地内の一角に馬術部の練習場、2018年に建て替えられた厩舎（16馬房内15頭）と蹄洗場、部室などのスタッフルームの施設が備えられているが、名だたる栄冠を残してきた明大馬術部の馬場は、意外なほど小さい。

1～2年生の部員は朝練前に集合して、朝飼（餌上げ）をつける。全員が集まるのは、6時30分。それぞれが練習をして、明大の和泉キャンパスとお茶の水キャンパスに通学する部員は7時半に、生田キャンパスに通学する部員は8時に馬場を出発する。

昼は、生田キャンパスの部員が昼飼をつけて清掃作業。18時から厩舎作業を始め、19時半に夜飼をつける。土～日曜日は、監督や助監督、コーチ陣が来る時間に合わせて集合時間を決め、作業と練習に勤しむ。宿直は不可だが、練習場の脇に明大馬術部の男子寮があるので、男子部員はそこで馬の緊急事態に備えている。



馬場はこぢんまりとしているが、この馬場からさまざまな名選手が巣立っていった。



厩舎や部室などは、2018年に建て替えられたばかり。

脈々と受け継がれる 明大馬術部の熱い“血”

明大馬術部では、顕著な成績を残してきた部員がコーチとなって後輩を指導し、強い選手を育てる好循環を生んできた。指導方針は「人間形成」で、規律ある態度と挨拶を重んじている。学業優先は昔から変わることなく、練習は朝の限られた時間に留まる。練習では目的意識を失わないように注意しながら、主将や部員らが中心となってトレーニングメニューを構築。狭小な馬場内を効率的、かつ集中して基礎的な練習に勤しむのが、明大馬術部の伝統だ。

スポーツ特別入試で明大馬術部へ入部した石井李佳さんは、「レギュラー選手として、競技会に出場してきました。不本意ながら、特筆するような活躍はまだできていませんが、誰よりも選手と馬に真剣に向き合ってきました」と、主将に抜擢された時のことを回想する。

「全日本学生馬術競技大会で優勝することを目標にしています。そのためには、個人



主将の石井李佳さん。個性派ぞろいの部員たちをうまくまとめている。

の技術のみならず、出場選手を部員みんなでサポートすることが必要です。部員たちは皆、個性豊かなので、お互いを尊重して仲良く、うまくオン・オフができる雰囲気をつくっていききたいです」(石井さん)

副将の高橋義明さん(政治経済学部2年)は、昨年行われた第69回全日本学生賞典総合馬術大会において、明鳳とのコンビで個人第3位を勝ち取ったエース。高橋さんの祖父と父が調教師で、小学2年生の時に観戦したG1レースにいたく感動して以来、ジョッキーになりたいと乗馬を始めた。

「大学を卒業したら、競馬の世界で働きたいという夢があります。明大馬術部に所属している以上、目標は全日本学生馬術大会で団体優勝できるように頑張りたいです」(高橋さん)



副主将の高橋義明さん。全日本学生馬術競技大会で団体優勝を狙う。

出場人馬の力だけではなく 部員の団結力も強さの秘訣

監督の佐藤五志さんに、話を聞いた。

「明大馬術部は、伝統的に文武両道と人間形成を基本にしてきました。先輩が後輩の面倒を見るのは当たり前。規律は厳しいですが、先輩と後輩が分け隔てなく自由に意

明治大学馬術部	
創設年	1920年
部長	柳沢敏勝
監督	佐藤五志
主将	石井李佳
部員数	男子9人 女子6人
馬匹数	15頭
主な戦績	2019年 全日本学生馬術三大大会 2019障害飛越競技団体3位、同3種目総合4位、第72回東京六大学馬術競技大会 団体優勝(6連覇)



写真左から、コーチの大貫俊隆さん、助監督の中村章さん、監督の佐藤五志さん、助監督の青山辰美さん。

見を言い合えるコミュニケーションを大切にしています」(佐藤さん=以下同)

他の大学に比べて馬場が小さいのではと、率直な疑問をぶつけてみると、「馬場は横幅20m、縦幅60mの長方形で、大きさは1963(昭和38)年に二子玉川から生田へ移転して以来、変わっていません。比較的狭いほうがいいと思います。フラットワークを中心に練習し、コンビネーション障害馬術競技の練習の際は馬場を斜めに使います。限られた時間の中で効率よく練習できるように、学生みずからが考えることが重要です」と、きっぱり話してくれた。

助監督の青山辰美さんにも話を聞いた。「馬と選手のポテンシャルは、非常に高い位置にあります。出場選手を部員みんなでサポートしながら競技大会に臨むのは、明大馬術部の昔からの伝統です。競技中の集中力を身につければ、全日本学生三大大会の団体優勝もそう遠くないと感じています。一般の学生も、馬術部で活躍できる土壌はあります。さまざまな風を取り込み、多彩な考えを吸収して、強い明大馬術部をつくっていききたいですね」(青山さん)

明大馬術部に代々引き継がれてきた優勝という文字に、強いプレッシャーを感じているのではと勝手に想像してしまうが、多くのオリンピック選手を輩出してきたという矜持、OBたちの支援、勝利をつかむための部員たちのたゆまぬ努力は、生田緑地の高台に情熱という炎を燃え上がらせている。大喝采に包まれる日は、遠い未来の話ではなさそうだ。